

批評・紹介

金陵古蹟圖考

朱 俠著

民國二十五年八月商務印書館發行、菊版三〇九頁、
折込附圖七葉、定價一元二角

金陵古蹟名勝影集

朱 俠編

民國二十五年七月商務印書館發行、四六倍版九六頁
定價二元五角

右兩書は表題からも判る如く對をなすもの、一はテキスト、他はプレートである。後者は序文にもある如く攝る所の照片二千餘張より三百十七張を精選したものである。編著者朱俠は獨逸仕込の新進學者で今中央大學の教授。既に「建康蘭陵六朝陵墓圖考」なる好著のあることは本誌前號に水野君の紹介した所。堅實な科學的方法を以て歴史地理の研究を着々行ふあたり、好感がもたれる。

金陵即ち南京の古蹟は至つて繁多である。それで本書研究の範圍は有形の史蹟を主とする。尤も城郭・宮闕・

陵寢・祠廟・玄觀・梵刹・園林・邸宅より溝渠橋梁に及ぶ建築藝術がその中心部分となる。但し人文の發達は天然の環境によるから第一章には先づ金陵の形勢を敘べ、山脈水系の大概を略述する。自然地理が既に明らかになつたから第二章は金陵の沿革を綜述し、第三章以後は下記の如く歴代史蹟を分敘する。秦漢以前之遺蹟(第三章)六朝城郭宮闕遺址(第四章)六朝陵墓(第五章)南朝四百八十寺(第六章)隋唐之遺蹟(第七章)南唐之遺蹟(第八章)宋元之遺蹟(第九章)明代之遺蹟(第十章)滿清及太平天國遺蹟(第十一章)。古蹟の今日に存する者は地理の分布に依り、區を分ち類を分つて敘述する。即ち第十二章に於ては玄觀・祠宇・梵刹を第十三章は園林第宅を總敘し、第十四章結論を以て終つてゐる。毎章各節の末に歴代詞人——朱俠自らも含めて——の詩詞題詠を附し、思古の幽情を發し盛衰の觀感を興す、とす、ととしてゐる。

研究方法は飽迄實地調査を主とし撮影測量の工作を施してゐるが、遺跡の湮滅せるものは之を古籍に求め一々出處を註明してゐる。而してその參考書籍は百種に上つてゐる。以上は本書緒論に言ふ所を抄書したものである。

テキストの末に附した「金陵附郭古蹟路線圖」を展げて第一章の形勢と十二、三章の現存せる古蹟を読み、併せてプレート参照するならば居ながらにして金陵に遊ぶが如き思ひあらしめる。かく現状を理解して後、上は秦漢以前の遺蹟より下は太平天國のそれに至るまでを通讀すれば興味深くこの地の歴史が達觀できるであらう。私自身そこまで精讀してはゐないが讀過中一二氣の附いたことがあるから今後この書を読む人のために書留めておかう。テキストとプレートを對照すべきことは當然すぎる程當然なことであり、著者自らも圖考の凡例中に「別印金陵古蹟名勝影集問世。惟一圖一考相輔而行。故本書所註圖頁。皆指金陵古蹟名勝影集而言也。」といひ、影集の方にも同様注意してゐる。然るに圖考中に指示した圖版番號で影集を参照すれば似ても似つかぬ寫眞が出てくる。尤も中には合致したものもあるが殆んど番號が違つてゐる。圖考十五頁鍾山の條に始めて影集の参照圖番號が載つてゐる。圖一九二より一九六を参照せよとあるので影集を見ると一九二は毘盧寺之供棹で以下山らしきものは一つもない。鍾山は圖二〇四より二〇九を参照すべきである。即ち圖考と影集では十二、三圖番がすれ

てゐるのである。蓋しもともと第何圖のA B等とあつたものを通番を附したために漸々後になる程すれがひどくなつたものであらう。折角の便利な仕組が之ではぶつこはしである。いづれ出版周刊あたりにその訂正が出るであらう。

次に金陵史蹟研究の參考書として百種に上る典籍が掲げられてゐるが、柳詒徵等の編纂した首都志卷十五藝文志三、南京掌故書目には朱氏の書目に洩れてゐるものが少くないから互に參看すべきであらう。尤もこの兩者共に洩れたもので管見に入つたものが二種ある。一は劉名芳の寶華山志であり、二は劉世珩の南朝寺考である。南朝寺考は孫文川の書を原本としてゐることは陳作霖の南朝佛寺志と同様であるが、劉氏のこの書は更に孫陳兩氏の説を補正したものであるから當然參考に供せねばならぬ書物であらう。この外にも參考すべき書にして朱・柳兩氏の目から洩れてゐるものがあらう。更に完備した金陵史蹟研究參考書目の編纂を希望して已まぬ。

圖考第六章南朝四百八十寺は右の陳作霖の南朝佛寺志に依つて表を立てその沿革を一目瞭然たらしめてゐる。その詳しいことは第十二章近代の梵刹中に分紀してゐ

る。この兩者は圖考と影集の如く「相輔而行」べきものであるから、沿革表の下に第十二章の參照頁を附しておかれたらと望蜀の感に堪へぬ。

第四章六朝城郭宮闕遺址に關しては本書一讀後、岡崎氏の「六代帝邑攷略」(桑原博士還曆記念東洋史論叢所收)を讀まれんことを希望する。殊に本書第二節の六朝水道考は岡崎氏論文中の諸水攷略に見ゆる如き深き史的理解にまで高められねばならない。

六朝陵墓については本書の著者には別に專著があり、本誌前號で水野君がその時「朱希祖(朱偁の父)が前篇で張璠の一誤にかぞへた棲霞山獅子衝宋文帝陵説をとり極力考證した陳文帝陵説を採用してない」(七八頁下段)ことを指摘したのであるが、圖考第六章の陵墓では家大人の注意もあつたのか陳文帝陵説に轉向してゐる。流石に專著まであるだけにこの章はすつきりしてゐる。

その他かき續ければ際限ないから打切る。本書の功名談は凡例中に列舉してあるからそれを參照してこの書の價值を認めること。兎も角この調子で史蹟の調査が進められて行くことは異邦に在つて支那の史地を研究する者の限りなき喜びでなければならぬ。(森 鹿 三)

西漢社會經濟研究

陳 嘯 江著

中國社會史叢書(八) 民國二十五年三月新生命書局
出版四六判、定價一元

民國二十二年(一九三三年)伍啓元と言ふ人が「中國新文化運動概觀」を著して、その時までの支那に於ける新思潮新運動に對して一應の整理の試みをなして、其の中に「支那は今や西歐文化の直輸入、盲目的模倣の時は過ぎて東方文化の新たな提倡が始まつてゐる。東方文化の新たな提倡は未だ始まつたばかりでこれがやがて西歐文化論者の勢力に代つて勃興するか、それとも單なる廻光反照の類に過ぎないか今は判らないけれども、西洋文化の缺陷は東方文化の研究を待つて、始めて一層深く認識されることは間違ひないであらう。將來たとへ西洋文化論者が勝利を得ることありとも、思想的に見て、此の新提倡の東方文化論の影響は必ず受けざるを得ないであらうし、かくて始めて西洋文化に盲従すると言ふ病態がなくなるであらう。此の變化こそ甚だ重要なことである。現在の支那の一般人の心理的病弊は他人の模倣を欲しなと言ふことではなくして、盲滅法に他人の模倣を事と